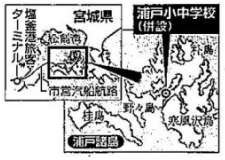
離島の特認校　地域一丸で在校生増

人口減少が進み、全国で公立小中学校の統廃合が加速している。日本の人口がピークだった2008年以降に姿を消したのは全体の1割超の約3500校に上る。統廃合が進んだ過疎地の小規模校は今、どんな課題を抱えているのか。08年に教育ルネサンスの連載「学校統廃合」で取り上げた学校を再訪した。

統廃合の小規模校　12年ぶり再訪

野々島に向かう塩釜市営汽船内で読書をする児童ら（2月25日朝）

粉雪がちらつく2月28日の朝。宮城県塩釜市の塩釜港を出発した市営汽船には、40人を超える子供たちが乗っていた。浦戸諸島の一つ、野々島にある市立浦戸小中学校に通う児童生徒だ。約30分の乗船時間は読書をして過ごす。



野々島の人口はこの10年余で半減し、約60人になったが、同校の児童生徒は46人に上る。45人は学区外の本土から、もう1人も隣の桂島からやってくる。学区外から児童生徒を受け入れる特認校となった05年度以降、在校生は増加傾向に転じ、18年度には53人まで増えた。

新聞やテレビで取り上げられ、「自然豊かな環境で丁寧な指導を受けられる」と評判になったことが大きいという。

同県大崎市から通う小学5年の佐藤杏さん(11)は、昨年4月に転入した。朝夕の通学では、母・奨奈さん(43)が片道40分かけて港まで車で送迎する。「恥ずかしがり屋だった娘が自分から発言し、しっかりあいさつできるようになった。少人数で先生との距離も近い。安心して親の自分を出せるのかもしれない」と奨奈さんは喜ぶ。

浦戸小中では、合同で運動会を開き、中学校の教諭も小学校の5、6年生を教えるなど、併設校ならではの教育に力を入れる。春は浜でアサリを取り、秋の合宿ではカヌーを走らせる。

塩釜市営汽船で野々島に到着した児童ら

そんな四季折々の体験活動も用意する。アサリの稚貝を浜にまき、カヌーの手入れをしてくれるのは、浦戸諸島の住民でつくる学校支援地域協議会のメンバーだ。

同小の佐藤康教頭(54)は「高齢化が進む中、子供たちの元気な声が消えたら島は廃れてしまうと、地域が一体となって協力してくれる」と感謝する。

15年度からは、浦戸諸島の自然や伝統を学ぶ「浦戸科」を小中の全学年に設けた。特産のノリやカキの養殖、東日本大震災の経験を踏まえた避難所運営など、学年ごとにテーマを決め、住民や地元の専門家から話を聞く。小学4年の鈴木怜碧君(10)は「毎日、船からカキの養殖用のイカダが見えて、どうやって育てるのか知りたかった」と笑顔を見せた。

20年度から浦戸小中に新たに通うのは小学生5人、中学生4人。全員が学区外からだ。鈴木和彦校長(56)は「次に何人入ってくるのかという懸念は毎年ある。10年、20年先もこの学校があってほしい」と話す。島の学校を残すため、魅力の発信に今まで以上に力を入れていくつもりだ。（新美舞）

特認校　学校選択制の一つ。特色ある学校づくりや、小規模校が児童生徒を学区外から広く受け入れることを目的に、通学区域に関係なく就学を認める学校を指す。秋田市の「自然いっぱいオープンすくーる」など、独自の名称をつけるケースもある。

2008年1月24日「島外から子供呼び込め」

宮城県の浦戸諸島の小学校2校は04年、1校に統合され、翌06年、「野々島の浦戸中」に併設された。08年の取材時、島の人口は約150人。児童生徒は計30人で、うち10人が学区外の本土から船で通っていた。

バス通学拡大　委託料　財政圧迫

2月27日の夕方、授業を終えた子供たちが、4台のバスやワゴン車に次々と乗り込んだ。新潟県阿賀町立三川小では、児童94人のうち90人はバス通学。通学時間は最長約30分だ。人口減少により、児童数はこの10年余りで半数程度になった。18人の教職員が指導にあたり、きめ細かな授業に工夫を凝らす。野口典弘教頭(47)は「児童は減っても環境は恵まれています」と胸を張った。

町内の小学校は昨年4月、三川小以外の6校が2校に統合され、計3校になった。通学区域は一気に広がり、18年度に37%だった町内の全小学生のスクールバス利用率は、20年度には86%に上昇する見込みだ。

路線バスを運行するバス会社では運転手不足が深刻化し、町内ではバス路線の廃止が進む。

スクールバスに乗り込む児童（2月27日、新潟県阿賀町で）

廃止された地域では、スクールバスに住民が相乗りする「混乗」が始まり、混乗エリアの拡大は避けられない状況だ。

20年度のスクールバス運行業務委託料は、前年度比約1000万円増の約1億900万円。過疎化が進む町にとって、少なくない出費がのしかかっている。（溝口徹）

2008年1月16日「ハンデを生かす　バス通学」

08年の取材時、児童174人の住ほぼ全員がバス通学だった。三川小は合併前の旧三川村にあった7校が05年までに段階的に統合、三川中に併設された。当時の通学距離は最長約12キロ。バスなど計6台を使っていた。